

十全同窓會會報

〒920-8640
金沢市宝町13の1
金沢大学医学部
十全同窓會会報
編集委員会
印刷／ヨシダ印刷(株)

(題字…佐藤保十全同窓會会長)

卒業生に贈る言葉

医学部長兼医学類長 山本 健



卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんは

昭和二十四年から金沢大学医学部・附属医院職員と十全同窓會会員に親しまれてきた、「金沢大学医学部医学科」最後の入学生です。さらに、金沢大学医学部創立百五十周年記念式典を最上級生として祝った学年でもあります。伝統ある金沢大学医学部医学科の卒業生として、誇りを持って医師・医学研究者としての道を歩んで下さい。

皆さんの学年は、勉学のスペース確保に苦労した、気の毒な巡り合わせの学年でした。平成二十三年秋に始まった医学図書館改修工事のために、旧外来棟二階に引越した手狭な仮医学図書館しか

利用できず、またカリキュラム前倒しによつて早まった四年生のチュートリアル教育のために、前年度までは国家試験の追い込みの勉強に使うことができた多目的室(チュートリアルルーム)の使用を制限され、インターネット接続環境が整備された教育棟のパソコン実習室はいつも満員という状況が、医師国家試験まで続きました。この三月末に落成した医学図書館の充実した設備を見るに付け、勉強場所を探してさまよった諸君の苦労が想い出されます。そのような恵まれない境遇にありながら、旧がん研(D棟)一階会議室、旧臨床研究棟二階研究室などに分散して受験準備に集中し、最終的には新卒者の医師国家試験合格率九十七・九%、国立大学医学部四十三校中第二位の成績を修められたことに、心からの拍手を送ります。

皆さんが金沢で過ごされた六年間の想い出は、この地で培った友人・同級生との

の絆とともに、一生の宝物です。金沢を離れて新しい土地で医学の研鑽を始める人、また金沢の地に留まり、地域の医療に貢献しようと志す人、いずれにとつても、大学時代の友人は頼もしい助っ人です。さらに全国には六千名を超える医学部十全同窓會の先輩が活躍しておられます。同窓會の先輩に助けられることもきつとあるでしょう。さらに将来、皆さんの後輩が皆さんに助けられ、同窓生のありがたさをしみじみ感ずる事もあると思います。何処の地で活動されようとも、十全同窓會との連絡を保つて下さい。十全同窓會関係者にとつて、郵送した同窓會会報が宛先不明で戻ってくることはどうも哀しいことはありません。

重い交換レンズを持つていこうか置いていこうか迷っている報道写真部員に毎日新聞のデスクが一言

「迷った時はしんどいほうを選ぶんだ」これは報道写真部員に限ったことではありません。皆さんの人生が実り多いことを祈っています。

春の叙勲

旭日小綬賞

松田 尚武

(昭和三十九年卒業)

瑞宝小綬賞

高櫻 英輔

(昭和四十年卒業)

旭日双光賞

黒崎 正夫

(昭和三十九年卒業)

平成二十五年度

金沢大学医学部十全同窓會總會

日時 平成二十五年七月六日(土)

午前十時

場所 金沢大学医学部記念館

(金沢大学医学部構内)

式次第

- 一、開会の辞
- 一、議長選出
- 一、議長挨拶
- 一、物故会員に対する黙祷
- 一、会務報告 理事長
- 一、医薬保健学総合研究科報告 医学類長
- 一、医学部創立百五十周年記念事業 支部長紹介
- 一、議案審議
 - (一) 平成二十四年度決算
 - (二) 平成二十五年度予算(案)
 - (三) 役員改選
 - (四) その他
- 一、閉会の辞

《教授就任講演》

「骨肉腫に対する挑戦」

機能再建学 (整形外科学)

土屋 弘行 教授

「口腔癌の浸潤像と悪性度に関する臨床ならびに基礎的研究―高悪性4D型癌の克服を目指して―」

細胞浸潤学 (歯科口腔外科)

川尻 秀一 教授

教授就任講演は、脳医科学専攻・がん医科学専攻・循環医科学専攻・環境医科学専攻のUp-to-dateコースを兼ねます。

石川県医師会生涯教育研修会指定を受けております。多数ご来聴下さい。

松井修教授・井上正樹教授 退職記念講演会・記念式

平成二十五年三月二日、本年三月末日をもって定年退職された松井修教授と昨年十一月九日に退職された井上正樹教授の退職記念講演会および記念式がそれぞれ十全講堂および医学部記念館で開催された。

記念講演会では、松井教授は「画像で探り画像映像下で治療する―新しい医療の創生に携わった四十年」と題し、四十年余に亘る母校での研究・診療・教育活動の来し方を概観された。放射線診断学の分野での業績としては、Dynamic Sequential CT during Arterial Portography (CTAP) と命名された方法を開発し、原発性および転移性肝臓の早期高感度診断を世界に先駆けて可能にしたことや、独自の画像観察から一九九〇年前後という早い時期に肝細胞癌多段階癌のコンセプトを打ち出されたことが述べられた。インターベンショナルラジオロジーの分野では、肝臓に対する塞栓療法や大動脈瘤に対するステントグラフト治療を成功裡に開発されたことが示された。これらの成果が世界に普及し、また、臨床ならびに基礎医学教室との多数の共同研究によって支えられたことや多くの優れた後進の育成につながったことにも聴衆は深い感銘を受けたことであった。

井上前教授は「ヒトの寿命に対する一考察」と題し、テロメラゼに関する研究成果を中心に述べられた。テロメラゼという細胞老化やがん化に関わる重要な遺伝子の調節域を世界に先駆けてクロニングした功績はつとに有名であるが、本講演でもヒトテロメラゼ遺伝子の調節を司るDNA配列とそれらに作用するタンパク質因子の全容が示されるときともに、がん化に密接に関わる配列を利用した特異性の高いがん診断ベクター、がん治療ベクターの開発をはじめとする応用研究の成果も紹介された。さらに、エストロゲン受容体とテロメラゼ遺伝子との相互作用の解明に基づき、「なぜ女性には男性より長命か」など老化に関係する諸問題についての新しい考え方も披露され、聴衆を啓発し、今後の研究に裨益するところ大であった。なお、本講演では触れられなかったが、井上先生の子宮頸癌とヒトパピローマウイルスの関わりに関する研究とその成果の臨床応用も高い評価を受けてきている。

記念講演会にひきつづき、退職記念式がとり行われた。山本博実行委員長のあいさつの後、実行委員長から記念品が贈呈され、中村信一学長、菊池修一石川県健康福祉部次長からの祝辞につづき、松井・井上両先生のあいさつがあった。ついで、放射線医学教室と産科婦人科学教室を代表してそれぞれ中川御琴さんと穴田広子さんから花束の贈呈があり、佐藤保十全同窓会長のご発声で乾杯した後、記念パティに移った。名誉教授の先生方、同窓の諸兄弟姉、同僚、関係の方々との和気あいの歓談の中、瞬く間にときが過ぎ、富田勝郎附属病院長の万歳三唱で散会した。

(医学系長 山本 博 記)

退職ご挨拶

経血管診療学（旧放射線医学）分野

松井 修



平成二十五年三月をもって退職致しました。昭和四十七年に本学医学部を卒業後

ただちに放射線医学教室に入局しました。はからずも英国でCTの臨床応用が初めて報告された年であり、その直後から

の各種画像診断とそれを用いた画像映像下非侵襲的治療（IVR、血管内治療を含む）の革命的な進歩に巻き込まれました。夢中で取り組み、あつという間に四十一年間が経過しました。この間、約一年文部省在外研究員としてアメリカとスウェーデンに留学した以外はほとんどを大病院での診療に従事してきました。まったく新しい領域であり日常診療での経験の集積や工夫がそのまま臨床研究論文になるという環境の下でいくつもの新しい知見や技術を世界に送り出すことができ、昭和五十八年に

助教授、平成十年には医学部放射線医学講座教授に就任し、平成十二年の医学系研究科の改組により循環医科学専攻血管病態制御学講座経血管診療学分野教授となり今日に至りました。この間、革命的に進歩する画像医学への十分な対応と総合病院（チーム医療）の要としての放射線科診療を大病院と関連病院で確立すること

を大きな目標としてきました。幸い優れた同僚や後輩に恵まれ、また金沢大学病院の各診療科の温かいご支援やコラボレーションで、日本有数の高い放射線診療レベルを達成できたものと自負しています。また十全同窓会に所属する先生方の温かいご支援で北陸の基幹病院でも医局員の教育を行っていたいただき高いレベルの放射線診療を確立することができました。これまで支えてくださった方々に心からお礼申し上げます。

在職中は大病院放射線部長、医学系研究科長を務め、いくつかの困難な問題にも直面しましたが、診療放射線技師、先輩や同僚教授、事務の方々などから多くのご支援を受けなんとか努めることができました。お世話になった方々に感謝致します。こうした中で、放射線部長就任直後に発覚した「放射線過剰照射事故」は規模の大きい医療事故であり、患者さんをはじめ多くの方々に迷惑をおかけしました。この経験を放射線科・部として徹底検証し現在の安全対策に生かしていますのでお許しをいただければと思います。

教育と研究は診療と混然と一体化したなかで行ってきました。在職期間中に約一三〇名の同僚や後輩とともに学び、現在放射線科専門医として活躍していることは大きな喜びです。私自身の研究としては、微小肝臓癌診断法の開発、肝細胞癌多段階癌の臨床における発見と画像所見の解明、肝細胞癌に対する亜区域塞栓療法の開発、大動脈瘤に対するステントグラフトなどのIVR技術開発などを行ってきましたが、臨床各科や基礎医学教室との協力・支援によって初めて可能

分子移植学（産科婦人科学）分野

井上 正樹



私は一九九四年十一月に金沢大学・産婦人科学講座・主任教授に任じられ、十八年間金沢大学

にお世話になりました。その間、私は以下の事業を手がけました。

① 診療

教室運営の「Originality」「Internationality」「Humanity」を基本理念として掲げ、教室内のコア研究グループを再編し、同門会を全国的規模で再構築を行い、診療の連携と相互理解を深めた。

一九九九年四月小児科と連携の基に周産母子センターを附属病院に開設した。田中政彰氏が中心となり、ハイリスクの合併症妊娠・分娩を昼夜問わず受け入れ、安全安心の分娩体制が確立された。また、放射線科と連携してセレクトロニクス腔内照射装置を導入した。

金沢市医師会と共同で子宮がん検診に全国に先駆けHPV検査を導入し、「金沢市方式」として評価された。HPVワクチンの有効性検証のために、石川県産婦人科医が一体となり「子宮頸がんゼロプロジェクト」研究会を設立した。

② 教育

二〇〇六年、私が提案した教育プログラムが文科省から選定され、その後「周生期医療学講座」（寄附講座）を設立し、新井隆成氏が中心となり米国家庭医学協会と連携し、AUSO (Advanced Life Support for Obstetrics) 教育プログラム

を軸に、世界基準の教育プログラムを実践している。海外との交流を深め、教育やブレゼンテーション・スキルの向上のために米国人教師を准教授として採用している。

③ 研究

① アロマトーゼ研究

酵素欠損症を世界で初めて発見した生水真紀夫氏は米国留学し、「New England Med」など多くの国際誌に発表した。二〇〇五年千葉大学産婦人科学主任教授として招聘された。

② テロメア・テロメラゼ研究

京哲氏と高倉正博氏は世界に先駆け「HTRF」プロモーターの遺伝子クローニングに成功した。テロメラゼ研究は癌細胞の可視化、腫瘍融解ウイルスによる治療、疾患モデルとなる不死化細胞の作製など、臨床使用可能な技術開発へと展開した。これらの研究成果は「Nature Med. Cancer Res. Oncogene」などに多数発表された。

③ 癌細胞内情報伝達系の解明

癌の特性検索を進め、癌の分子標的治療薬の開発や分子情報に基づいた癌治療の個別化を目指す。金谷太郎氏は子宮体癌ではMLH1 (DNAミスマッチ修復遺伝子) の過剰メチル化 (epigenetic change) が早期変化であること (Robert A. Weinbergの名著「The biology of cancer」に掲載) を示した。中村充祐氏は子宮内膜癌にも癌幹細胞の存在を確認した。分子標的薬が将来臨床的に有効な治療薬となるとの予見から、二〇〇一年日本産婦人科分子標的研究会を発足させた。

④ HPV研究

大阪大学時代からHPV研究に従事して

でありました。また、肝癌に関する研究では金沢大学の推薦により平成二十一年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）を受賞することができました。数多くの十全同窓会を中心とする皆様のご支援の賜物と思っています。

きた。HPV-DNA検査のがん検診への応用、HPV感染による宿主免疫応答解明、そしてワクチン開発である。英国ケンブリッジ大学留学から帰国した笹川寿之氏が引き継ぎこれを発展させた。

⑤ 生薬の開発と評価

鈴木信孝博士は本学で最初の寄附講座「補完代替医療学」を設立し（二〇〇二）、同時に日本補完代替医療学会を創設し初代理事長に就任している。QOLの側面

す。長い間本当にありがとうございました。金沢大学医学系・金沢大学病院と十全同窓会の今後の発展を祈っています。なお、先進画像医学研究教育講座（寄附講座）特任教授としてしばらく活動を継続しますのでよろしくお願いいたします。

から検証している。大野智氏は厚生労働省の研究班員として「がんの補完代替医療」指針をまとめ、大阪大学杉山教授との共同研究にて婦人科癌のWT1免疫療法の有効性評価を行った。

以上の教室の業績評価は後世に待ちたいが、私の実感は土俵作りに明け暮れた十八年であったように思います。金沢大学・産婦人科教室から育った多くの人材の土俵入りを夢んでいます。

受賞

文部科学大臣表彰科学技術賞

分子神経科学・総合生理学 櫻井武教授

光栄にも平成二十五年文部科学大臣表彰科学技術賞研究部門を賜りました。受賞内容は、「オレキシンの発見とその作用の解明の研究」です。睡眠は脳のシナプス恒常性の維持にかかわり、脳および精神の機能の保全に不可欠である他、気分障害、アルツハイマー病などの危険因子にもなります。現在、睡眠に問題を抱える人は五人に一人に達しており、睡眠の問題が人々の健康や社会・経済に及ぼす影響は想像を超えるものになっております。

私は一九九八年に新規脳内物質オレキシンの発見しました。この物質が脳内でどのように覚醒を制御している

かを解明していく過程でこの物質が覚醒と睡眠の切り替え機構に深く関わっていることを明らかにしてきました。オレキシン系の機能低下はナルコレプシーをはじめとする過眠症の原因となり、一方、オレキシン系の機能亢進は不眠症と深く関わりと考えられています。現在、複数の製薬会社で睡眠導入薬としてオレキシン受容体拮抗薬が開発され、二〇一四年には製品化が見込まれています。私自身の研究が直接創薬に結びついたのはエンドセリン受容体拮抗薬に続き二回目です。医学研究の目的は疾病の治療手段を提供することであり、大変うれしく思います。今回の受賞を励みに今後

も新規生理活性物質の発見とその機能解析に携わり、微力ながら医学に貢献できればなにより幸いです。

医学図書館竣工式・記念祝賀会

「この度『医学類の顔』にあたる

新医学図書館が完成しました」

金沢大学医学図書館は、大正十二年に作られた旧制金沢医科大学附属図書館が前身です。その後、昭和二十四年、金沢大学の発足に伴い金沢大学附属図書館の医学部分館となりました。

今回改修が行われた旧医学図書館は、昭和四十四年に竣工した建物で、金沢大学の総合移転や再開発が進む中、最も古い建物のひとつとして取り残されていました。建築後四十年以上経ち、床のタイルがはがれ、壁にひび割れが走るなど老朽化が著しい状態でした。この状態を打開するため、附属図書館では平成二十年以降、増改築を要望してきましたが、このたび、その念願がかない、平成二十五年三月十四日、新医学図書館が開館しました。これで平成元年に始まる金沢大学の「総合移転」と「総合開発」の最後を飾る一ページにふさわしい建物が完成したわけです。

この日、新医学図書館玄関で、笠原隆文部科学省大臣官房文教施設企画部計画課整備計画室長、佐藤保金沢大学医学部十全同窓会会長、中村信一学長、櫻井勝情報担当理事、柴田正良附属図書館長、横田崇医学図書館長によるテープカットが行われた後、竣工式を二階十全記念スタジオで開催しました。式には約九〇名の参加者がありました。

式では、柴田附属図書館長の式辞、中村学長の挨拶に続いて、文部科学省の笠

に新図書館を見学していただきました。引き続き、附属病院四階宝ホールに移動し、記念祝賀会を盛大に行い、長澤公洋文部科学省研究振興局情報課学術基盤整備室長等からお祝いの言葉をいただきました。



新医学図書館の床面積は、改修前後で比べると一八四五㎡から三一八五㎡と約一・七倍、閲覧席数も百二十九席から三百三十五席と約二・六倍に増加しました。今回劇的に変わったのは、以前は非常に天井の低い、積層式四階だった書庫が、ブックラウンジと呼ばれる吹き抜けのスペースに生まれ変わった点です。また、隣のE棟とは渡り廊下でつながり、学生にとつては図書館がより近いものとなりました。

今回の増改築にあたり、次のようなゾーニングを行いました。

一階は、静かに学習できる「静」の空間、二階は、共同学習できる「話」の空間、三、四階の書庫と二階の十全記念貴重書室は、「知」を継承する空間、そして、一階ブックラウンジは、人が集う「集」の空間といたしました。

その中で特に特徴的なのは二階です。近年の学習行動の変化に対応した施設を

備えました。

フロアのはほぼ全体をグループで討論しながら学習できるスペースとし、オープンスタジオと名付けました。このような空間で共同学習することにより、学生たちが、伝える・聞く・まとめるといったコミュニケーション能力を向上させることを期待しています。また、利用者用パソコンが二十四台あり、情報検索やレポート作成などに利用できます。

同じフロアにある十全記念スタジオは、講習会などを開催できるセミナールームとして整備しました。イベントがない場合は、自由に使える部屋として開放しています。この部屋と貴重資料室に「十全記念」と冠させていただきましたのは、増改築にあたり金沢大学医学部十全同窓会から多大なご寄付をいただいたことを記念するためです。

その他、予約して使うグループ学習用の部屋、グループスタジオが四部屋あります。それぞれテーブル及び椅子の色が違った部屋になっています。廊下側の壁面はガラス張りになっており、他の利用者の様子を見て刺激を受けてもらうことを意図しています。

最後に書庫についてご説明します。当初の計画では、三階四階を合わせて二十二万冊収容可能な電動密集書架を入れる予定でしたが、予算不足のため、現在三階には、書架は設置されておりません。書架に入らなかつた

本を段ボールに入れて置いてありますので、書庫ではなく「倉庫」になっています。次年度には、必ず設置できるよう概算要求をしていく予定です。

今回の増改築にあたり、学生の意見も取り入れられました。平成二十一年度、学生自身が一年生から六年生までのアンケートを行い、結果を附属図書館に要望書として提出してくれました。学生が図書館に求める主なものは、「豊富な図書量」「豊富な自習スペース」「情報ラウンジ」の三点でした。今回の増改築により、「豊富な自習スペース」「情報ラウンジ機能」については充実させることができましたと自負しております。

また、旧図書館は重厚な作りで、暗い雰囲気だったこともあり「ガラス窓を増やして外の光がたくさん入るとよい」という要望もありました。この要望も解決できたのではないかと思います。

この要望書の最後には「図書館が充実していたら、自然と学生は勉強します」という言葉がありました。その言葉どおり、学生に大いに利用してもらえたら、喜ばしいことです。そのことによって、医学図書館の増改築に関わった多くの人たちの苦勞が報われることとなります。

今後は、さらに図書館機能の充実をはかっていきたいと思っています。皆様のご支援をお願い申し上げます。

(横田 崇 記)



学会報告

第二十八回

日本静脈経腸栄養
学会学術集会

平成二十五年二月二十一日(木)、二十二日(金)の両日、金沢駅東口周辺の施設を利用して第二十八回日本静脈経腸栄養学会学術集会を開催させていただきました。本学術集会が日本海側で開催されたのは初めてです。学術集会と教育セミナー、更新セミナーなどを合わせておよそ九千人が参加しました。

日本静脈経腸栄養学会は、臨床栄養に関する研究を幅広く扱う学会で、同様の学会のなかでは世界最多の会員が在籍しています。今回はがん患者の栄養管理、救急・集中治療領域の栄養管理など、幅広いテーマを取り上げました。また、臨床栄養学と関連が深い七学会・一団体と合同企画、合同教育講演を開催いたしました。

国外では特に東アジアに焦点をあて、中国と台湾、韓国の静脈経腸栄養学会とEast Asia Joint Sessionを開催しました。今後、

これら各国の学会との交流が一層深まることを望みます。

本学術集会は参加者の会場滞留率が高く、参加人数が三千名を超えたところから会場の席



数不足が問題となっていました。そのため、

今回は石川県立音楽堂に加えて駅周辺の四つのホテル、二つのホールを使い、合計で六千

席の会場を設定しました。さらに、これらを結ぶもてなしドームの地下広場に総合受付と賑わいづくりのコー

ナーを設け、金沢駅東口周辺全体を学会場に見立てました。その結果、スムーズな人の流れが得られるとともに、快適か

第三十五回

日本造血細胞移植
学会総会

平成二十五年三月七日、九日の三日間、石川県立音楽堂、ANAクラウンプラザホテル金沢、ホテル日航金沢、金沢市アートホテルの四会場を用いて、第三十五回日本造血細胞移植学会総会(会長・中尾眞二教授)を開催いたしました。医師のみならず、造血幹細胞移植チームを構成する様々な職種スタッフ約二千七百名が一同に会し、盛会裏に終えることができました。

今回の総会では、中尾教授が掲げた『移植がもたらす「無限の喜び」』奇跡の検証とこれから「のテーマに沿って、四つのシンポジウムと六つのワークショップが企画されました。会長シンポジウム「SCT for bone marrow transplantation」では、韓国・アメリカ・



つ十分な学会の空間を提供できたと考えております。

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科長の山本博教授には「須藤憲三・金沢大学・糖尿病研究」と題して武藤輝一記念教育講演を賜り、大変感銘を受けました。また、このように充実した学術集会を主宰できましたのも、同門であります心肺総合外科学教室、ならびに十全同窓会の会員の皆様のご支援の賜物と考えております。心より感謝申し上げます。

(大村 健二 記)

イタリアから招聘した世界のオピニオンリーダーの先生方とともに、再生不良性貧血に対する骨髄移植の課題について検討されました。また、シンポジウム「急性GVHDの基礎と臨床」では、高見昭良輸血部長他四名の演者により、様々なアプローチによる急性GVHDの制御について活発な討論が行われました。

中尾教授が打ち出された「議論」重視の方針に基づき、いくつかの新しい試みも取り入れられました。まず、同時進行のセッションは少な目にし、各演題に対する討論の時間を長めに設定しました。特に、ウイルス感染症や血球貪食症候群など、移植の成否を握るテーマを取り扱ったワークショップ

においても、一定のコンセンサスを導き出していただくために総合討論の時間を設けました。また、ポスター



セッションでは議論を活性化するために、従来一斉に行っていた演者によるプレゼンテーションは廃止し、代わりに演者には三十分間ポスター前に待機していただき、参加者とじっくり議論をしていただくようにいたしました。この議論への参加を促すために、優秀ポスター賞は参加者の投票によって決定することとし、選定された演題に投票した参加者にも抽選で記念品を贈ることにいたしました。

本総会は看護師を中心としたコメディカルスタッフも参加するのが特徴です。移植後のQOL改善をテーマとした医師・コメディカルスタッフ合同シンポジウムも開催されました。

最終日の夕刻には、市民公開講座を企画しました。特別講演に前宮城県知事の浅野史郎氏をお迎えしたほか、移植に係わった皆さんと「無限の喜び」を分かち合うべく、実際に当院で骨髄移植を受けた患者さん、骨髄バンクドナー経験者、主治医、看護師等、様々な立場からのメッセージをいただきました。通常の講演会とは切り口が異なった涙あり笑いありの講演会でした。

金沢での開催は第三回(服部絢一教授)、第十一回(松田保教授)に続いて三回目でした。金沢大学は本邦の骨髄移植を牽引したパイオニア施設の一つであり、教室の名前が細胞移植学とあるのもこの伝統に由来するものだと思います。

本総会の開催にあたっては第三内科同門の先生方をはじめ、十全同窓会先輩諸氏のご支援を頂きました。深謝致します。(事務局 山崎 宏人 記)

第八十三回

日本衛生学会学術総会

平成二十五年三月二十四・二十五日の三日間、金沢大学鶴間・宝町キャンパス、金沢美術工芸大学において第八十三回日本衛生学会学術総会を主催しました。日本衛生学会は社会医学系の学会としては最も伝統があり、金沢で開催されるのは平成六年に岡田晃元学長が会長を務められて以来、十九年ぶり五回目の開催になります。

当学会は環境保健と予防医学を中心に広範な研究が展開されており、本学術総会のテーマは「生を衛る学問の使命ー環境と暮らしの再生を目指してー」とし、メインシンポジウムには「国際環境保健の動向」を配し、「グローバル化」がキーワードの今日、若手研究者が今後進めていく上での指針をシンポジストが実体験に基づき示しました。また、シンポジウム「ホスピタリティ・アート」を座長高田重男先生（金沢市立病院院長・昭和四十九年卒業）に、市民公開講座・創基

百五十年記念事業として開催し、「医芸連携」の実践例として今後の発展の可能性を示しました。「スーパードクター」が中村裕之教授（本学公衆衛生学・



昭和六十年卒業）や篠俊成准教授（本学内科・昭和六十三年卒業）等を講師に催されました。また、本学会としては新企画のモーニング・レクチャー（教育講演）を、疫学については、三浦克之教授（滋賀医大・昭和六十三卒業）が「国民代表

集団の cohorts 研究 NIPPON DATA」実験系については、松島綱治教授（東大・昭和五十三年卒業）が「臓器線維化の分子・細胞基盤」を講演して頂き、大変好評でした。特別講演には海外招待講演として「Obesogens, Stem cell and the Developmental Programming of Obesity」Prof. Blumberg (UC.Irvine) と「原爆放射線の健康影響」小笹晃太郎疫学部長（放影研）また、日本学術会議との共催で、シンポジウム「東日本大震災後の住民の現状と環境汚染物質リスク」を開催しました。ランチョンセミナーでは、「ベトナムにおける枯葉剤による環境・健康破壊」Son 先生（ベトナム資源環境省次官、「石川県下の飲食店の受動喫煙防止対策の実態」岩城紀男先生（NPO 法人禁煙ねっと石川理事長・昭和四十年卒業）等の講演を頂きました。

KKR 金沢での懇親会では、二胡の演奏によるオープニング後、井関尚一研究域長、山野之義金沢市長のご挨拶、岡田晃元学長の乾杯発声、金沢市伝統芸能の長唄と石川県酒造組合提供の地酒二十五種の利き酒で多いに盛り上がりました。学会期間中、五百五十名を超える方々のご参加をいただき、無事盛会のうちに終了することができました。これもひとえに十全同窓会の先生方の格別なご指導とご支援の賜物と心より感謝申し上げます次第です。

（城戸 照彦 記）

医師国家試験結果

医学部長・医学類長 山本 健

第一〇七回医師国家試験の本学新卒者合格率は九十七・九％であり、大学別順位は国公立大学八十校中第九位、国立大学四十三校中では東京大学に次いで第二位でした。新卒者・既卒者を合わせた総合合格率は九十三・三％であり、国公立大学八十校中第二十二位、国立大学四十三校中第七位でした。医学図書館の改修工事に伴う勉強スペースの減少、カリキュラム前倒しによる教育棟二階多目的室の使用制限など、落ち着いて勉学のできる部屋の確保に苦労しながらも好成績を挙げた卒業生の健闘を心から讃えたいと思います。

これまで本学が六年生を対象に実施してきた医師国家試験対策は、有志の教員による数コマの補講を別にすれば、ごくわずかです。平成二十四年度に新たに実施した国家試験対策としては、これまで自宅で受験していた国試模擬試験を、六年生が講義室に一同に会して、国家試験と同じ条件で受験するよう改めたことが挙げられます。模擬試験によって国試の時間配分を体得できたこと、また模擬試験の成績から各自の不得意分野を知ることができ、本番までに必要な勉学の方向が定まったことが有効であったと思われます。長時間にわたる模擬試験の試験監督を担当して下さった教育委員会の教授・准教授の先生方の熱意が学生に伝わったことも、追い風になりました。

医師国家試験の合格率は、大学の評

第107回医師国家試験結果 () 内は第106回結果

	受験者	合格者	不合格者	合格率	全国平均
平成25年3月卒業生	94名 (101名)	92名 (93名)	2名	97.9% (92.1%)	93.1% (93.9%)
平成24年3月以前の卒業生	11名 (8名)	6名 (4名)	5名	54.5% (50.0%)	59.4% (60.0%)
合計	105名 (109名)	98名 (97名)	7名	93.3% (89.0%)	89.8% (90.2%)

価基準として軽視できない数値です。第一〇七回医師国家試験は本学医学科学生の高い潜在能力と自主的な努力によってよい成績を修めることができましたが、今後は医師国家試験型の統合試験による卒業判定を実現し、学生の負担を軽減することが必要です。医師国家試験の出題内容は年々変化しています。学生の講義・実習を担当される教員各位には、最新の医師国家試験問題に眼を通していただき、新しい出題分野の知識を学生が無理なく吸収できるようご指導をお願いいたします。最新の医師国家試験問題は、医師国試参考書のほか、以下の模擬試験業者URLからも閲覧可能です。〈http://bs.intcrip.com/forums/forum/kokushi_107/>

論 説

「真の疾患予防を目指したスーパー予防 医科学に関する三大学（千葉・金沢・長崎） 革新予防医科学共同大学院の設置」

この度、平成二十四年度国立大学改革強化推進事業に「真の疾患予防を目指したスーパー予防医科学に関する三大学（千葉・金沢・長崎）革新予防医科学共同大学院の設置」が採択されました。共同大学院とは、一応、金沢大学が代表を務めますが、連合大学院とは形態が異なり、各大学の役割と責任はまったく同等というのが大原則であります。したがって、まして学生も教員も、本学所属のままです。まずは平成二十五年にスーパー予防医科学共同教育研究センター（仮称）を設置し、平成二十八年度の大学院の設置を目指します。本稿をお借りしまして、三大学のコーディネータを務めています中村が、その報告を兼ね、これまでの経緯をご説明申し上げます。

「二十一世紀は予防の時代である」と言われて久しいですが、その間、予防の一番の目的であります疾患の罹患率が決して低下した訳ではありません。これは、私も予防医学を専攻する者にとつて大いに反省すべきことでもありました。予防医学の理念では生涯を一貫した医療保健福祉制度によって全員が健康の恩恵を受けることができることが大前提であり、実際は健康に関する個人参加の偏在が著しいことによる健康格差

が存在し、また生活環境の健康への影響が個人ごとに異なるため、個人差を考慮した予防医学の展開には程遠いのが現状であります。その原因として、臨床研究の場であり、また病院研究と予防医学の場（フィールド）であり、また住民研究としての疫学が、必ずしも効率よく連携されていたとは言えません。このような背景から、疾患の罹患率の低下を目的とする予防医学を展開するためには、より早期の時期、例えば、乳幼児、学童・生徒、あるいは青年期、壮年期での予防を実施することを前提に、予防の精度を飛躍的に向上するための科学的技術の開発が喫緊の課題であります。さらには昨今における医療事情は、超高齢化による医療費の膨大な高騰と過疎化による医療崩壊の危機に対応するために、予防医学により力点を置く必要があります。そのためのテララーメイド型の予防医学の構築や新しい医療保健福祉制度を実施、すなわち個々の予防法の妥当性を科学的に証明する一方、政策提案型予防医学を施行しなければならぬという思いに至りました。

このような状況の元、私も新しい予防医学として「スーパー予防医学」を提唱しました。それは従来の一―三次ま

でのマクロ予防（一次―環境整備や生活習慣改善、二次―疾病の早期発見、三次―疾患の再発・悪化予防）に加え、より精度の高い予防を実現するためにマイクロ予防（〇次予防―遺伝子を含め生まれるがらのリスクによる予防）を融合させ、〇次から三次までを網羅し、個人の生まれながらの特性にあわせた予防法を提供するテララーメイド型予防法です。対象疾患としては、がん、心疾患、脳血管疾患や糖尿病、高血圧、脂質異常症などの生活習慣病、アレルギー疾患や感染症、認知症、自閉症などの広汎性発達障害などです。方法論として重要なポイントとは、一つは三大学が出し合うフィールド（千葉大学では、西千葉地域、柏市、金沢大学では、志賀町などの能登地域、長崎大学では離島あるいはペラルーシ共和国）において疫学ベースにおいて住民の血液などをもとに、臨床医学分野とともにゲノムコホートを実施します。そこでは、全塩基配列に加え、包括的発現遺伝子、エピゲノム解析、糞便中のメタゲノム解析によるエピジェネティクスを実施し、また従来の疫学や栄養などによる介入研究にバイオインフォマティクスを組み込み、予防における確固たるエヴィデンスを作ることであります。他方では、臨床研究を三大学で共同実施することを提案しております。そこでもバイオインフォマティクスを利用した生活習慣病の早期発見システムの構築は革新的な二次予防の柱となります。これらの疫学と臨床研究の仕組みは、従来のマクロ予防を得意とした社会医学領域とミクロ予防を専門とする臨床医学領域の有機的な連携を基本とし、予防あるいは介入の効果につい

ても評価を可能にする新しい学問体系と考えております。

三大学の疫学や臨床の場を共用する利点ともに、三大学の強み・特色を活かし、連携して取り組むことによって、診断法・予防法の開発の一層のスピードアップ、データ数の増加によって、検証・評価を多角的に実施することによる評価・検証精度の飛躍的向上などを可能にすると期待されております。将来的には、我が国発の革新予防法を創出し、その国際標準化を目指すとともに、国際的に革新的予防法を展開できる人材を育成、輩出することを目指しております。大学院研究科（博士課程）レベルでこのような共同大学院を設置することは、国内における医学領域だけでなく、全学問領域においても初めての試みであり、紆余曲折も予想されます。十全同窓会の先生方にもご理解いただき、ご指導をお願いする所存でございます。

（中村 裕之 記）



病院紹介

国民健康保険 小松市民病院

△小松市民病院の現況▽

小松市民病院は平成元年四月、現在の地に新築移転致しました。現在の病床数は三百六十四床で、その内訳は、一般三百（緩和ケア病床十床を含む）、精神五十、結核十、感染症四です。二十六診療科および三つの診療所を有しています。すべての医療分野を持つ公立病院は全国的には少ないのですが、地域のニーズに即したものであります。平成元年地域医療連携の草分けとして三十床の開放型病床を開設しました。

平成十九年には病棟を診療科別から機能別（消化器内科＋消化器外科病棟、ICU等）に編成しました。

△小松市民病院の目指す医療▽

地域の中核病院として市民の健康を守るために、質の高い医療を提供する、を私たちの使命（基本理念）として、職員からの公募を基に平成二十一年に四つの目標（基本方針）を定めました。

一、患者さんの人権と権利の尊重
 分かりやすい説明、やさしい言葉で語ること、医学用語を極力使わないこと、セカンドオピニオンを推進すること、常に新しいクリニカルインディケータを提供（がんの成績、代表的な疾患の成績や各委員会の活動を掲示）すること、に心がけています。

二、がん医療、救急医療、生活習慣病を中心とした医療体制

①がん医療

平成十九年地域がん診療連携拠点病院の認可、平成二十一年には緩和ケア病棟（十床、全室個室）を設立しました。がん相談支援センターの設立、放射線治療や外来化学療法室を充実し、がんの集学的治療を行っています。当院の緩和ケア病棟では精神科医の回診によるコンサルテーション、歯科・口腔外科医の回診による口腔ケアが行われています。緩和ケアチームやNSTチームも関わっています。

②救急医療

当院の当直医の負担軽減を目的として平成十九年小松市、能美市、加賀市医師会の協力で小松能美事務組合による南加賀急病センターが設立されました。月曜日・土曜日は十九時～二十二時三十分まで、日曜日と休日は昼休み一時間を含めて九時～二十二時三十分まで、内科と小児科の初期救急専門医療施設として設置されたものです。当院に併設され、入院を要する患者は当院に紹介されます。地元医師会医師と大学からの応援医師で運営されています。当院の内科医、小児科医も診療当番として参加しています。平成二十二年地域医療再生基金を得て、平成二十四年十一月には南加賀救急医療センターを当院西口に開設しました。特に心筋梗塞、脳循環障害、交通外傷等の緊急患者を早期に治療することを目的としたものです。同時に最新鋭のCT断層装置や血管造影診断治療装置を設置しました。現在、救急車搬入件数が増加しているにもかかわらず、ウォーク・インの患者が増加していません。救急処置を要

する患者中心の診療という当初の目的に適っていると云えます。当直体制は内科医と小児科医を中心とした内科系医師一名と外科系医師一名です。当直医以外の診療科はオンコール体制です。

一方、災害拠点病院の使命として平成二十五年二月にはD・I・M・A・Tが発足いたしました。

三、生活習慣病、小児、産科、精神医療
 糖尿病については、南加賀の糖尿病患者の登録から生活指導、治療、学校や会社への啓蒙活動まで一貫した診療を行っています。

なお、小児疾患、合併症を持った妊婦の受け入れ、急性期精神疾患も当院の重点医療です。

四、地域医療機関、社会保険福祉施設との連携強化

五大癌のバス、循環器疾患、脳神経外科術後、糖尿病等のバスを用いて地域の診療所との連携、ならびに、在宅を希望する患者には訪問看護ステーションや介護施設との連携が構築されています。

五、働きやすい職場環境を目指して

職員間のコミュニケーションは特に重要で、人の立場に立った言動が大切であることを接遇研修会等で強調しています。資格取得希望者には登録費、研修費、宿泊費等を病院が全額負担としています。さらに、職員満足度調査による要望事項の改善に努めています。二十五年四月からは院内夜間保育所が開設されます。医師に対しては当直明けの午前中には早めに帰宅できるような業務の見直しを

伝えてありますが、時には可能ですが、現実には不可能に近い状況です。

ところで、当院は独立型の臨床研修指定病院ですが、研修医にとつてもよい環境でありたいと思っています。研修医には一対一で指導医がつき、救急を含め、多くの症例を経験することができ、診療の仕方、論文の書き方なども熱心に指導しています。

これからも小松市民病院は市民に安心と信頼を提供するため質の高い医療を提供し、社会に貢献していきます。今後ともご支援をお願いいたします。

（院長 川浦 幸光 記）



病院紹介

社会福祉法人恩賜財団 福井県済生会病院

△病院概要▽

当院は昭和十六年に済生会支部福井診療所として開設されました。昭和二十五年に病院となり、平成五年に市中心部より現在の地に新築移転しています。現在の病床数は四六〇床、二十二の診療科、職員数は千三百名です。

済生会は明治四十四年に明治天皇の済生勅語をもって創立され、生活困窮者への医療支援を使命（済生の心）としています。生活困窮者への無料低額診療を行っており、平成二十三年より福井県地域生活定着支援事業として出所前の受刑者への支援活動を行っています。地域医療連携事業に力点をおいており、平成五年に地域医療連携室を開設し平成十六年には北陸初の地域医療支援病院に認定されるなど地域完結型医療を推進しています。新築移転時にオーダーリングシステムを導入し、平成十四年には電子カルテを、同十六年より福井県情報ネットワークを利用した遠隔地画像診断システム等IT化を推進しています。

平成二十五年二月、平成二十四年度日本経営品質賞（大規模部門）を医療界で初めて受賞しました。この賞は顧客の視点から経営全体を見直し自己革新を通じて顧客の求める新たな価値を創造し続ける組織を表彰するものです。当院理念「患者さんの立場で考える」を全職員が共有

し、職員のDNAである六つのバリュー（進取の精神、変革、前向き、使命感、やさしさ、チームワーク）を基盤として理念を実践しています。経営方針は「職員満足なくして患者満足なし」であり、「患者さんに選ばれる病院」を目指しています。職員満足向上の一歩として、フラットな組織によるコミュニケーションとチームワーク向上のためにワールドカフェやワークアウト等のビジネスツールを活用しています。患者さんの立場で考えた外来として、平成十七年に疾患・症状別外来（内科と外科が一緒など）、顔の見える外来（ブロック中待合）、女性診療センター（婦人科、泌尿器科、乳腺科、肛門科）を整備しました。患者さんの立場で考えた新しいサービスチームとして、よろず相談外来（MSW・看護師）、看護外来、メディカルコーディネーター、メディエーター、医療秘書、フロアマネージャー、術前検査センター等を創設しています。

診療・教育・研究を三本柱とした医療を目指しています。がん診療では、昭和五十二年に全身CTを全国二番目に導入して診断能力を高めるとともに、平成七年に放射線治療棟を新築、平成二十一年にトモセラピーを導入（北陸初）し、二年後に二台体制にてがん治療を強化しています。平成十年に独立型緩和ケア病棟を建設し、平成十六年にはがん診療連携拠点病院に認定されています。平成十六年にPETセンターを開設し、これまでのがん診療体制を集約するため、平成二十三年に集学的がん診療センターを開設しました。がん患者の心の隙間を埋めるため、メディカルカフェやがん哲学外

来を運用することで「心と体に優しいがん診療」を推進しています。急性期医療

として、平成十八年に日本海初の脳卒中センター（SCU）を開設。平成十九年に六十四列CT検査機器を導入し狭心症などの血管病変の早期診断能力を高め、現在三台体制です。平成二十年、病院では本邦唯一の米国心臓協会公認ACLSトレーニングセンターを開設し、全職員中九十八%が心肺蘇生認証を受けるなど病院全体での救急対応能力向上を図っています。平成二十一年度より県唯一の肝疾患連携拠点病院として県内の医療従事者ならび市民レベルでのウイルス性肝炎対策に取り組んでいます。平成二十二年より米国メイヨー・クリニクと交流を始め、多くのことをベスブックと交流をしています。平成二十四年にメイヨーの内科教授を招聘し質改善と職員教育に関する国際セミナーを院内開催しました。今年六月開催を予定しています。職員教育の場として平成二十三年に開設したトレーニングセンターでは、BLS・ACLSトレーニング（AHA公認）、高規格人形を用いた実践的シミュレーショントレーニング、そして、医療技術の向上を図っています。研究面では、学術部が医師や医療スタッフが学会やセミナーに必要なデータ作りを支援しています。三カ年ビジョンや部署毎の年度目標の進捗を管理し評価するため、独自の済生会マネジメントシステム（SQM）を運用しています。SQMは、バランススコアカード、ISO、シックスシグマを癒合したツールです。SQMによる一年間の総合評価の結果を済生会DAY（十二月末）にて公表することで全職員の経営

参加意識を促しています。

今年七月に竣工する南館一階を患者さんのためのエリアとし、入院前検査センター、あらゆる相談事や問題への対応、医療情報提供、そして、癒しの空間を演出します。メディカルカフェの横にスターバックス、子どもと大人が遊べる自由空間、子供が描いた絵など、病院らしくない病院を目指しています。

（院長 田中 延善 記）



教室だより

分子情報薬理学(薬理学)

【沿革】

薬理学教室は、金沢医専・金沢医科大学生理学教室の石坂伸吉教授が、ドイツ・イギリスへの留学から帰国した一九二六年に金沢医学専門学校・薬物学教室として発足した。一九五四年に当時の結核研究所の岡本肇教授が第二代教授に就任し、薬理学教室と改称した。一九六八年に正印達助教授が教授に就任した。一九九四年に徳島大学から吉本谷博助教授が教授として転任した。二〇〇一年に金沢大学大学院医学系研究科・循環医科学専攻・機能分子医薬学講座分子情報薬理学研究分野となる。

【教育】

大学院博士課程では、分子情報薬理学特論(十二単位)と細胞シグナル伝達学(六単位)、および初期総合カリキュラムの情報処理演習(二単位)を担当している。修士課程では、必修選択演習の医科学方法論演習(四単位)と医科学研究特論(十単位)、および選択講義の分子細胞生物学(二単位)を担当している。医学類では、三年生の薬物治療の基礎の講義と実習(五単位)および基本的基礎配属(三単位)を担当している。

【研究】

細胞が刺激されると、細胞膜に含まれるリン脂質からホスホリパーゼ

によってアラキドン酸が遊離される。このアラキドン酸からシクロオキシゲナーゼやリポシゲナーゼで合成される脂質メディエーターは、がん、動脈硬化、炎症・アレルギー等において重要な役割を果たす。特に、5-リポシゲナーゼで合成されるロイコトリエン(LX)は、気管支喘息の発症に深く関与しており、臨床的にもロイコトリエン受容体拮抗薬は高い治療効果を示す。また、12-リポシゲナーゼで三種類(白血球、血小板および皮膚型)、15-リポシゲナーゼでは2種類(15-LX A および15-LX B)のアイソフォームが同定されている。これまで、マクロファージに含まれる12-リポシゲナーゼが酸化LDLの生成に関与し、動脈硬化発症に重要であることを明らかにした。

血漿や卵胞液などの哺乳動物の体液には、リゾホスホリパーゼDと呼ばれる酵素が存在し、この酵素はリゾホスファチジン酸という生理活性脂質の産生に寄与している。リゾホスファチジン酸は、形態形成、生殖、育毛、血管形成、創傷治癒など生理的に重要なイベントに関わっている一方、癌や神経障害性疼痛など特定の病気との関係性も知られている。リゾホスファチジン酸は、生体内では微量にしか存在しないが、リゾホスファチジン酸が作用する場面ではその存在量の増加が認められる。このリゾホスファチジン酸の変動量を捉えるため、亜鉛錯体を用いた簡便なリゾホスファチジン酸の定量法を開発し、現在、様々なリゾホスファチジン酸の生理的、あるいは病態生理的作用の解明を進めている。また、様々な動物の体液を分析する過程で、鶏卵の

卵白にもリゾホスファチジン酸とその産生酵素が存在することを見出した。鶏卵を保温すると、培養初期にリゾホスファチジン酸の増加が認められ、それと同時に卵黄嚢でリゾホスファチジン酸の受容体も増加することが分かり、卵白のリゾホスファチジン酸が卵黄嚢の血管形成に関わっていることを明らかにした。

生体防御機能を持ち様々な臨床応用が期待されるヘム分解酵素・ヘムオキシゲナーゼの調節、薬物や食品成分など種々の物質の生体への作用メカニズムや新機能の探索、低酸素応答などの研究を行っています。ヘムオキシゲナーゼ-1誘導剤の特許(小川、特許第五〇六二五四四号)を平成二十四年に取得し、ヘム分解系調節物質等を感染症治療薬として用いる特許出願(小川ら、特開二〇一〇一三三〇八)が現在審査中である。

(吉本 谷博 記)

お詫びと訂正

会報第一四三号五頁三段の記事に誤りがありました。お詫びを申し上げ、訂正させていただきます。

終わりから五行目

《正》長田 郁子先生

《誤》長瀬 郁子先生

会費納入のお願い

同封の払込用紙をご利用下さい。



ご住所やご勤務先など異動の際には左記事務局宛にご連絡下さい。

十全同窓会事務局

TEL 〇七六二六五二二三

FAX 〇七六一三四四二〇八

住所 千九二〇八六四〇

金沢市宝町十三一

E-mail juzen@med.kanazawa-u.

ac.jp

URL <http://juzen-ob.w3kanazawa-u.ac.jp/>

uac.jp/

教室だより

バイオトレーサ診療学(核医学)

沿革

核医学教室は一九七三年に日本初の独立講座として初代久田欣一教授のもとに発足した若い講座であります。核医学診療はそれに先立つこと十九年前の一九五四年に当時放射線科医員であった久田教授が真性赤血球増多症に ^{222}Rn を投与したことから始まってあります。その翌年には早くも甲状腺機能亢進症、甲状腺分化癌に対する ^{131}I 内用療法が開始されております。一九九五年就任の第二代利波紀久教授のもとでさらなる内用療法の推進のため、日本最大規模の新アイソトープ病棟が二〇〇一年に完成し、 ^{131}I -MIBGによる悪性褐色細胞腫、神経芽腫に対する新たなアイソトープ内用療法が開始されました。二〇〇六年就任の現在の第三代絹谷清剛教授のもとで内用療法はさらにバリエーションをひろげ、 ^{90}Y -抗体CD20モノクローナル抗体イブリツモマブチウキセタン(ゼヴァリン®)による悪性リンパ腫治療、 ^{177}Lu による転移性骨腫瘍の疼痛緩和治療も導入され成果をあげております。核医学画像診断の面でも講座発足当時より、腫瘍、循環器、中枢神経領域を中心として臨床、基礎的研究が活発に進められ、日本の核医学をリードする講座としての地位を確立しております。PET・PET-CT装置が併設された金沢先進医学センター内のPETセンターに最新のPET/CT装置が二台設置されております。望月セン

ター長を中心に当科の医師が毎日読影に参加しております。保健適応が拡大され早期胃癌以外のほぼ全ての悪性腫瘍が保険でカバーされていきます。また今年四月には心サルコイドーシスも保健適応となりました。臨床面ではほとんどが癌に関わる画像診断ですが、研究面では脳の糖代謝画像による認知症の早期診断、動脈硬化の診断、スポーツ外傷予防のためのトレーニングにより全身の各筋群の活動度がどのように変化しているか、といったユニークな研究が各科と共同で進められております。

内用療法…甲状腺機能亢進症の治療は欧米では ^{131}I による内用療法が第一選択の治療法となつていますが、日本では薬物治療が依然として主流です。外来での治療も可能となっており、今後のニーズは益々増加するものと思っております。転移の可能性のある分化型甲状腺癌では、全摘後に ^{131}I による内用療法を施行することを標準とし、予後の改善に貢献しております。 ^{131}I -MIBGによる褐色細胞腫、神経芽腫の治療は国内で最初に本院で治療法を確立させており、治療件数も国内随一で日本におけるオピニオンリーダーとしての地位を揺るぎないものとしております。

腫瘍…基礎分野では放射能標識抗体、ペプチド、核酸、種々受容体リガンド等々多岐にわたる放射性化合物の体内挙動の研究、新規放射性化合物の開発、既存治療との包括的戦略の開発を行っております。臨床面ではSPECT/CT二台を全国的に最も早い段階で導入しております。核医学画像の最大の特徴は特定の機能情報を画像化することにあります。そのため、従来のSPECTやPET三次元像では集積の位置認

識が難しいことが逆に欠点にもなつていました。しかしSPECT/CTによる解剖機能情報の融合により集積病変の質的診断能力が格段に向上しております。各種悪性腫瘍や内用療法での治療効果予測や、判定の精度向上にも寄与しております。悪性骨軟部腫瘍に関しては ^{111}In -DOTA、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MIBIによる腫瘍の悪性度の評価、術前化学療法の治療効果予測、効果判定、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MIBIによる抗がん剤多剤耐性を司るP糖蛋白発現の評価、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MAA動注による抗がん剤動注療法に伴う

局所副作用の発現予測等の臨床研究を通して新たな核医学診療体系を構築してきました。

循環器…心筋血流、心筋脂肪酸代謝の検討により心筋虚血、viabilityに関する多くの臨床研究を行つてまいりました。心機能に関しては虚血性心疾患、心筋症を中心に、心プールシンチ、持続心機能モニターによる心機能予備能評価法を確立しました。心電図同期心筋血流SPECTの血流と機能能を同時に評価する方法を確立し日常臨床で威力を発揮しております。また国内での虚血性心疾患における各種のEBMの確立に多大な貢献をしております。

分子イメージングにお



いたは、虚血再還流における心筋アポトーシスイメージングにより心筋障害の経時的検討、プレ、ポストコンディショニング等でのアポトーシスの抑制に関して報告してきました。また細胞外マトリックスに存在する分子群のなかで組織リモデリングに伴って高発現し、強い生物活性により組織リモデリングを制御するmatrixcellular蛋白の一つであるマテリンシンCの発現を画像化し、梗塞後の治療過程における左室リモデリングとの関連を検討しております。またメチオニンイメージングで心筋梗塞後早期でのマクロファージ浸潤を評価できることを示しました。

中枢神経…脳血流値をSPECTにて評価する方法を開発し全国的に使用されております。また視覚的に検出困難な血流異常を統計解析により検出することで認知症を早期に検出する方法も開発し、臨床に定着しております。神経内科との共同研究ではパーキンソン病や、レビー小体型認知症であるレビー小体病には ^{123}I -MIBGによる心臓交感神経の除神経がその他の変性疾患との鑑別に有用であることを示し、広く国内で普及しております。

今後も内用療法、核医学画像診断を通して臨床各科との連携により、医療の質の向上に努めてゆくとともに教育にも力を注ぐことが最も重要な責務と心得ております。研究においても世界レベルの仕事継続的行うべく精進してゆく所存です。これからも皆様のご指導・ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

十全昔話

結核の昔ばなし

羽咋市 正島 巖

(その一) 母の死

線香の煙がゆらぐ母の枕元にちよこんと座った六歳の小さな男の子は、そばでナンマンダブツを繰り返すおばばに尋ねました。

「おっかちゃん死んでしもたけど、どうかして生き返えらせることが出来んかね？」

おばばはびっくりして、涙をためたま答へに困っておりまして。そこにやって来た父が代わりに答えました。

「生き返らせる事はできるかもしれない。けどな…また直ぐに死んでしまうやろ。そうすりゃ、よけいかわいそうでないかね」

子供はもつと悲しくなり、ペソをかきそうになりました。

父は七尾高等女学校で生物学を教えていました。母を生きかえらせて欲しいと云う子供に驚きながら、まことしやかに答えたのでした。

「だめかねー」人工呼吸や心臓マッサージと言う言葉を覚えたばかりの子供は淋しく眩きました。

母の病は肺結核でした。医学が進んだ今日では容易に治せる病ですが当時は効く薬のない恐ろしい病気でした。

治療は安静、栄養・肝油摂取、医者からの解熱剤、鎮咳剤などでした。

母は八歳の姉、六歳の私と、三歳の弟の三人の子供を残してあの世へ旅立ったのです。法名釈尼妙禅、享年三十歳の若

さでした。

あれから今年でやがて八十年になります。次第に悲しみは薄れ、想い出は懐かしさに変わりました。彼岸の墓参りには、ただ冥福をお祈りするばかりでした。

(その二) 昔の治療

記憶も思考も衰えたやがて八十五になる老人の昔話は、間違いが心配です。ご容赦願います。

大学在学中にお教えを頂いた教授は沢山おられます。その中で怖かったのは細菌学の谷教授、外科学の久留教授だったと思います。谷教授は曲がった事を許さない先生でした。期末試験である生徒が解答を英文で書いたそうですが、これをご覧になった教授は激怒されその学生を退学処分されました。答えが出鱈目だったからでした。勇気のある偉い先生だったと思います。

久留教授の講義は理路整然、素晴らしいものでした。私達が最も好きな授業の一つでした。ロイド眼鏡をかけた柔和な顔立ちでしたが、突然厳しい質問をされるので、学生は常に緊張しておりました。

その久留教授が肺結核に罹られたのです。時々咯血されたと聞きましたが、手術を受けられることになりました。

終戦間もない頃で、結核の治療薬は乏しく肺の部分切除など外科的治療が出来ない時代でした。多くの難治性肺結核の患者には胸郭整形術が行われました。

久留先生の手術には東大木本外科のト部美代志助教授が来られました。

手術が始まると照明係りの仲井信雄先生は手燭をかけた術者の肩越しに深部を

照らしました。冷房は無く床に置かれた古い扇風機が足元に風を送っていました。術者、助手全員の頬に汗が流れました。周りの婦長や看護婦は首筋に流れる汗をガーゼで拭いてまわっていました。

当時、全身麻酔術はまだ実験段階の時代でしたから局所麻酔での手術です。術者、ト部美代志先生、第一助手、水上哲次先生、第二助手は松井繁先生、第三助手は瀬川安雄先生でありました。

胸郭整形術は患側の第二・三・四肋骨を切除し病巣を潰して治療する姑息的な術式です。意識があるまま行うので、患者さんは術中の会話や手術器具の音など全てが聞こえるのです。手術を受けられる久留先生はじつと痛みをこらえておられたと思いますが、遂に我慢の緒が切れたのでしよう。大きな声で怒鳴られました。

「痛い！いまインテルコスタリスを挟んだのは水上だろう」

激痛に、怒りを爆発されて、術者のト部先生にはなくフォルスタンド（第一助手）の水上先生に怒りをぶつけられたのでした。イカツイ顔でも心の優しいテツチャン（水上哲次先生の愛称）はさぞ辛かっただろうと思いました。

久留教授の術後はすこぶる順調で、元気になられ大阪に帰られました。

終わりに

結核に関わる二つのエピソードを書きました。内科外科を問わず、困難を極めた結核治療を経験した先生方の多くは、既に亡くなられたと思います。

肺結核の治療が手術不要となり安全な薬だけで終わる今日、若い先生方はほんの五十年前に「危険を伴う乱暴ともいえる治療がなされていた歴史」に驚かれたと思います。

最後に恩師故久留勝教授、恩師故ト部美代志教授、大先輩の故水上哲次教授のご冥福をお祈り申し上げます。

稿を終えるにあたり、投稿のお許しを賜りました山本 健先生にお礼を申し上げます。

クラス会

(昭和三十三年卒業)

平成二十四年十一月十七日(土)二年振りに、金沢ニューグランドホテルに集まりました。

いまさら飲み食いを楽しむ年でもなし。開宴三時間前の受付開始時にはほとんどの人が到着し、終宴までの七時間話し続けたも積もる話のタネは尽きませんでした。

会場の広さと人数がマッチしたのかとても楽しい会となり、終宴の頃には何人の方からも、「来年もこの部屋で」との提案があり、ホテル側も嬉んでいました。

平均寿命に達する年頃でもあり、すでに三割の方とは、永久の別れとなっています。いづれ散り散りとなる人間の宿命ではありますが、「最後の瞬間まで光り輝く人生を」誓って、「三三三会」を「燦燦会」と改めることにしました。

出席者二十六名 同伴夫人八名

(天下 陸郎 記)

わたしの願い事

医学類 五年 加藤 小百合

「腫瘍がみつかった。どうしよう、ガンかもしれない」

友人からそう告げられたのは、四年生の夏の終わりでした。以前から仲が良く苦楽を共にしてきた友人からの一言にどれだけ驚いたかは、今でもはっきりと覚えています。健康診断でひっかかって何となく精査をうけてみたら腫瘍がみつかり、あまりよくない像であり良悪性を判断するための検査をすることになって、結果が出るのはまだ先だということでした。「腫瘍」「ガン」というワードは医学を学ぶ上で耳にしない日がないほど何度も何度も聞いていますが、その電話口で彼女の発する「腫瘍」「ガン」は、同じものとは思えないくらいとても恐ろしく重たく聞こえました。不安感、衝撃などが入り交ざった感情がひしひしと伝わってくる中、こんなに元気なのに、こんなに若いのに、と電話の向こうの彼女を思いながら様々なことを思ったのを覚えていました。彼女は本当に取り乱していました。もしガンだったら手術。でも傷も残るし、失敗するかもしれない。でも大丈夫、私はきっと良性だ。でももし悪性だったら。でも、でも……。私には想像することしかできない不安と絶望と少しの希望が次々と現れては消えるのに耐えるのは、どんなに苦しいことだったのでしょうか。彼女は最後にぼそりと言いました。

「どうして私なのかな」

私はこれまでガンとはあまり縁のない人生を送ってきました。身近な親類や親しい人々の中でガンを発症した人はいま

せんでしたし、医学で多くの分野を学んでも正直ガンはどうも興味がもてないでいました。今や二人に一人が発症し、三人に一人がガンで死ぬと言われても、座学中心だった今まではなんだか遠い遠い別の世界の話のような気がしていたのが事実です。医学生がそんなことでもいいのか、とこうして文字にするとつくづく思います。だけど実際、世の中の私たちと同年代の人で、一体どれだけが「ガン」ときいて自分にも関係のあることだと感じるのでしょうか。医学を学ぶ同級生たちの認識は、どのようなものでしょう。

医療系の学校に通うその友人は、その件があつてから講義中の先生や周りの人々のささいな発言にも敏感になりました。「若い」「ガンにならない」といった意味を感じ取ると、いてもたってもいられなくなるし、現在、あるいは将来医療の現場に立つ人の口から発せられた言葉だから尚更。そりゃあ好発年齢とか頻度とか考えればそうだけだし、と彼女は言っていました。私は、彼女から初めて告げられたときに「こんなに若いのに」と思ってしまった自分を思い出しました。今まで気にも留めなかったことや言葉も、全て自分を責めているように感じ、哀れになってしまふ。いきなりの病氣やその可能性一つで、患者の身も心も世界も、がらりと変わってしまうのです。

ある日私がテレビをつけると、中高生を中心とした若者にガンについて紹介する番組をやっていました。とてもわかり

やすかったのですが、みていて一つ違和感がありました。それは、ガンというもの（全般的に）その人の行い次第でなるものだ、と誤解されてもおかしくないような伝え方をしていたということでした。確かに、一部の肺ガンは喫煙と深く関係しているし、飲酒や食生活が要因となってしまうものや、いろいろな行動、ウイルスの感染が要因となるガンもいくつかあります。そしてそのことを若者に知らしめることでその要因となることを控えさせ、将来の発症を減らそうという考えもわかります。しかし、まるでガンになったのは自業自得、ガン患者自身が悪いのだときこえるその言い方に私は嫌悪感を抱きました。友人の件で考えさせられ敏感になっていたのでしょうか、普通の人がそれを見ても同じように感じるかどうかはわかりませんが、ガン患者が見たら間違いなく辛く思うでしょう。日々の自分の行いのせいで発症した人はいれば、自分には何の非もないのに発症した人もいます。これはガンだけではなく他の疾患についても同じです。生活習慣病のように、日頃の食生活や運動習慣が大きく関わり、発症をある程度予防できる疾患もあれば、自己免疫疾患や遺伝病といった原因不明の難病もこの世界には山ほどあります。原因もわからず効果的な治療もできず、「どうして私なの」とどこにもぶつけようのないやるせない思いを抱えながら苦しんでいる患者がたくさんいるのです。そのようなことを私は改めて思い直しました。そしてそのような病気になる可能性は、だれにだって平等にあるはずなのです。

講義室内を見渡してみると、およそ百

人の同級生が講義に出席しています。みんなそれぞれの理由で医師を志し、受験を勝ち抜いて進級してきました。ここに来た理由を深く話し合うことはあまりないので、皆がどんな気持ちで医学を学んでいるのかは私にはわかりません。ただ、ほとんどの人に共通していることは、自分自身は健康であるということです。きつと同級生の中には、過去に重い病を患った人や現在苦しめられているという人が数人はいるかもしれませんが。でもほとんどは健康です。風邪さえひかない人だっているでしょう。そんな健康な医師に、患者の気持ちが一体どれだけわかるというのでしょうか。私の友人のように、何気ない一言も患者にとっては多くの意味をもちます。私が患者だったら、失わないとわからない健康のありがたみに「ぼけて」しまっている医者なんかには絶対診てほしくありません。今後実際に患者さんと関わらせていただく機会が増えていきますが、私たちの振る舞い方、そして経験したことのない「病」のことをどれだけ思えるかは大きな課題なのだと実感しました。本当に患者に寄り添うことのできる医師は、もしかしたら少ないのかもしれませんが。私はそのような医師に少しでも近づきたいと強く思います。

友人の最初の電話があつた翌月、腫瘍は良性だったとの一報がありました。得体的のしれないものを体内に含む違和感はぬぐえないようですが、彼女は数カ月一回のペースで痛い思いをして検査をし、フォローを続けています。この世界から病氣なんてなくなればいい、全ての患者さんがしあわせになればいい、と心から願います。

【支部だより】

三重支部

平成二十四年度十全同窓会三重支部会
総会は、平成二十五年二月十一日（月）
に津市内で行われました。本年度総会に
は十一人の
会員が出席
しました。

三重支部
では、前年
度より、支
部長が原田
資先生（昭
和四十六年
卒業）に交
代となり、
今回の総会
も、和やか
に進行していきました。（また、本年度
より、四日市市民病院救命救急センター
副部長の柴山美紀根先生（平成二年卒業）
も同窓会に参加して頂けるとの事で、現
在の会員は二十九名です。）



会計報告の後、その後、懇親会に移り
ました。懇親会も和やかな雰囲気のうち
に終わり、閉会となりました。

（黒川 義博 記）

写真 後列左から…春木祐司（平成十七
年卒業）、大石晃嗣（昭和六十三年卒
業）、山門亨一郎（昭和六十二年卒業）、
伊藤敏秋（昭和五十二年卒業）、中瀬玲
子（昭和六十二年卒業）、黒川義博（平
成二十一年卒業）、前列左から…野口孝
（特別会員）、水本龍二（昭和三十年卒
業）、原田資（昭和四十六年卒業）（支部
長）、祖父江直久（昭和五十一年卒業）、
森一満（昭和五十一年卒業）（敬称略）。

謝恩会

三月二十二日、金沢ニューグランドホ
テルにて平成二十四年度卒業生による謝
恩会が執り行われました。

会には多くの先生方にご出席いただ
き、和やかな雰囲気
の中、開会しま
した。まず山本健
医学類長からお言
葉を頂き、続いて
富田勝郎病院長の
乾杯の音頭で宴会
が始まりました。

さらに山本博医
学系長、井関尚一
医薬保健学域長、
堀修学生支援委員
長より、お言葉を
頂きました。

今年は、先生方
全員からお言葉
を頂くという新し
い企画に挑戦しま
した。入学時、基
礎系科目、臨床系
科目、BSLやク
リニカルクラーク
シップ、卒業試験、
国家試験と六年間
の大学生活を回想
しながら、先生方
のお言葉に聞き入
る卒業生が多くい
ました。思い返す
と一年一年は長い



ものの、あつという間の六年間でした。
その間、沢山の先生方や同級生に支えら
れてきたことを実感し、感謝の気持ち
が自然とわき上がってきました。特に今年
度は、図書館が改装工事中で勉強場所が
確保できない中、旧臨床研究棟を自習室
として提供して頂き、ビデオ講座や模試
などの国家試験対策を手
厚くして頂きました。心
から感謝申し上げます。

最後に、卒業生代表の杉
森慎君、和田明梨さんが
挨拶し、盛況の下、閉会
となりました。

二〇〇八年四月に金沢
大学が学域学類制に改組
されたことに伴い、私た
ちが医学部医学科として
の最後の卒業生となりま
した。金沢大学医学部医
学科で学び成長できたこ
とを誇りに思い、各々が
新しい環境の下、精進し
ていく所存です。

最後になりましたが、
謝恩会にご参加頂いた先
生方、そして六年間ご指
導頂いた先生方、大学関
係者の方々に改めて感謝
し、御礼申し上げます。
ありがとうございました。

（平成二十四年度謝恩会
実行委員長

山本 偉 記）

平成 25 年度 医薬保健学域医学類入学者出身都道府県

県名	人数	県名	人数	県名	人数
石川県	35	大阪府	3	三重県	2
富山県	16	神奈川県	3	秋田県	1
愛知県	9	静岡県	3	鹿児島県	1
京都府	6	岡山県	2	群馬県	1
東京都	6	長野県	2	鳥取県	1
千葉県	5	奈良県	2	広島県	1
岐阜県	4	新潟県	2	山梨県	1
福井県	4	兵庫県	2		



第二十回ノバルティス地域医療賞受賞 介護療養型老人保健施設 恵寿鳩ヶ丘

生垣 茂 (昭和三十三年卒業)



二月十四日、東京ホテルオークラで六人の方々と共に右の賞を受けた。

私の受賞理由は二点あった。第一は市立輪島病院勤務の頃行った肺癌検診に尽力したという点である。肺癌の医学的知識と治療経験の殆どない私を励まし教えてくれたのは、

金沢大学医学部の故高島力放射線科教授と故渡辺洋宇第一外科教授であり、協力してくれたのは、輪島市長以下の担当の職員皆さん、輪島市医師会、市立輪島病院職員の皆さんであり、その他多くの市民の皆さんであった。この方々のお力で全国的にも精度の高い「輪島方式」なる肺癌検診が続けられた。私は深く、厚く感謝している。

理由の第二は現在行っている高齢者医療である。しかし、私は高齢者医療を広く行っている訳ではない。障害のある高齢者の在宅ケアは大変難しい。高齢者の中には独居の方も少なくない。夫婦そろって寝たきりという例も多い。この方々に急に片麻痺や意識障害が生じた場合、悲惨な事となる。そういう危険が危ぶまれる状態の方を、優先的に積極的に、私達の施設は受け入れている。私は可能な限り私達の施設で医療を行い、他の総合病院へ移さない様に努力している。この施設で死にたい、死なせて欲しいという方々が、

入所者の大部分であるのが私達の施設の現状である。ご家族の方々や施設のスタッフと共に、尊厳死は如何にあるべきかを考えながら高齢者の医療を行っている。私はもう八十歳に近く、幾つかの疾患を持ち、身体を機敏に動かせない。そんな私のハンディを含めて、この賞が与えられたとすれば、私は申し訳ない事だと有難く思っている。

平成二十五年三月卒業生進路

青木 由宇	金沢大学附属病院	葛城 遼平	多根総合病院	内藤 千絵	静岡県立総合病院
青野 大輔	金沢大学附属病院	要石 就斗	富山県立中央病院	中川 亜希	公立羽咋病院
浅井 一希	金沢大学附属病院	加納 洋	大阪警察病院	中川 亮	金沢大学附属病院
網野 喜彬	福井県済生会病院	久呉 洋介	国立国際医療研究センター	中山 智博	兵庫県立西宮病院
雨宮 哲郎	相澤病院	蔵本 裕史	沖縄県立中部病院	永瀬 慶和	
栗野 啓	国立国際医療研究センター	黒田 格		南部 静紀	
井川 寛章	金沢大学附属病院	黒田 正洋		根本 穂高	虎ノ門病院
石塚 啓祐	金沢大学附属病院	桑原 佑典	神戸市立医療センター中央市民病院	野口 和寛	金沢大学附属病院
伊良部 仁	福井県済生会病院	郡司掛勝也	金沢大学附属病院	能澤 一樹	
上岡 顕	金沢大学附属病院	小泉 瑛子	金沢大学附属病院	野田 昌生	金沢大学附属病院
植田 大貴	沖縄中部徳洲会病院	小堀 史郷	仙台オーブン病院	林 一樹	兵庫県立加古川医療センター
上野 慎士	岡山済生会総合病院	小林 拓	富山県立中央病院	林 洸太郎	富山県立中央病院
大谷 知弘		小林龍太郎	豊橋市民病院	原 佑樹	高崎総合医療センター
大森 淳二	平塚市民病院	齋藤 駿河	京都医療センター	東 晶子	八戸市立市民病院
小川 太志	福山市民病院	齋藤 豊	上都賀総合病院	廣正 智	金沢大学附属病院
小川 尚彦	石川県立中央病院	作村 直人	金沢大学附属病院	福岡 佑太	金沢大学附属病院
沖 俊佑	京都第二赤十字病院	島田 貴史	金沢大学附属病院	藤田 直久	福井県立病院
沖村幸太郎	厚生連高岡病院	菅原 海	国蒙公費共済組合連合会 横浜栄共済病院	藤田 裕壮	自治医科大学附属病院
笠原 恵理	金沢大学附属病院	杉浦 拓未	福井県立病院	細川 恭佑	湘南鎌倉総合病院
		杉森 慎	石川県立中央病院	堀田 正亮	金沢大学附属病院
		角 康平	豊見城中央病院	本藤 貴恵	一宮市立市民病院
		高野 宏平	一宮市立市民病院	三浦 敦至	沖縄県立北部病院
		高橋 美紗	金沢医療センター	三浦 雅	金沢大学附属病院
		竹治 泰明	虎ノ門病院	宮岸 良彰	金沢大学附属病院
		竹下 諒		宮澤 宏幸	名古屋第二赤十字病院
		田辺 命	金沢大学附属病院	三輪 隆志	金沢大学附属病院
		谷 真智子	黒部市民病院	邑井 洸太	福井県立病院
		谷口 浩久	国際医療福祉大学三田病院	森 佑介	東京大学医学部附属病院Bプログラム
		谷村 航太	石川県立中央病院	安田紗綾子	東京大学医学部附属病院
		田野 翔	トヨタ記念病院	山田 裕樹	東部医療センター
		田畑 憲一		山田祐太郎	金沢大学附属病院
		辻 大祐	黒部市民病院	山本 偉	
		土屋 俊輔	金沢大学附属病院	弓手 惇史	君津中央病院
		堤 香苗	横濱市立大学附属市民総合医療センター	横田 航志	神戸市立医療センター西市民病院
		寺町 光代	岐阜県総合医療センター	吉川 茜	石川県立中央病院
		常盤 美羽	東京慈恵会医科大学附属病院	米澤 宏隆	石川県立中央病院
		土地 宏朋	手稲溪仁会病院	和田 明梨	福井県立病院
		戸邊 美穂	東京医科歯科大学病院		

94名(五〇音順)

金大病院CPDセンター完成記念式典の報告

金大病院CPDセンター完成記念式典が平成二十五年四月二十七日（土）、谷本正憲石川県知事をはじめ、関係者約百五十人の参加のもとに金沢大学附属病院の同センターで盛大に行われました。式典では、富田勝郎病院長が「四年間の長き月日をかけて念願のCPDセンターが完成し、本日ここに多くの関係者の皆様方とともに記念式典を迎え



ることができたのは、私にとって望外の喜びがある。今後は、遠隔地の医師が安心して地域医療に専念できるよう、CPDセンターを大いに活用していただきたい」と式辞を述べられました。また、中村信一金沢大学長は、「金大病院は、長年にわたり石川県のみならず、北陸三県の中核・拠点病院として、多くの医師を地方の病院に派遣し、地域医療の支援にあたっていたにいたっている。これから、このCPDセンターを大いに活用して、北陸の中核・拠点病院として能登北部ならびに南加賀をはじめとする地域医療の支援に、より一層尽力していただきたい。」と祝辞を述べられました。その後、谷本正憲石川県知事、山野之義金沢市長、近藤邦夫石川県医師会会長からも祝辞をいただきました。また、式典後には、CPDセンターと珠洲市民病院をフルハイビジョンのテレビ会議システムで結んで、「石川の地域医療を考える」の記念シンポジウムが開催されました。能登北部四病院の病院長や首長さんにも参加頂いていた珠洲会場からは、能登北部にとって医師確保・地域医療の確保は最も重要な課題であり、CPDセンターの開設によって能登北部の病院に安心して勤務してもらえ、支援体制が充実し、医師派遣してもらえ、環境が整備されたことへの感謝の言葉やCPD



一理事長から、今後も継続して金大病院を支援していく旨の心温まるお言葉と祝辞をいただきました。樽酒での鏡開きの後、金沢大学関連病院長会を代表して上田 博先生に乾杯の音頭をとっていただきました。そして、祝宴の最後にも、CPDセンター長の中締めで閉会となり、金大病院CPDセンター完成記念行事は成功裏に幕を閉じました。

CPDセンターのCPDとは、Continuing（継続的な）、Professional（専門職）、Development（能力開発の頭文字であり、職業人に必要な専門教育と能力開発を継続的に行うことを意味します。つまり、CPDセンターは職業人としてのスキルアップや専門能力を向上させるためのシミュレーション、生涯教育を目的とした施設であります。同窓会会員の皆様方が大いに活用していただければ幸いです。

（CPDセンター長 太田 哲生 記）

編集後記

百五十一周年にあたる新年度がスタートしました。医学部のキャンパスにも初々しい学生の姿が見られます。会員の皆様も、就職、転職などでご自身が新生活を始められた方、あるいは職場で研修医はじめ新人を迎えられた方が多いことと存じます。特に新卒生様の皆様は、医師としての第一歩を踏み出され、毎日が新鮮で張り切っておられることでしょう。新人を迎える立場の私たちも大いに刺激をうけ、初心にかえる良い機会となるように思います。

緑が日々濃くなるこの季節に今年度最初の会報一五四号をお届けします。年度の変わり目ということで、卒業生に贈る言葉、松井、井上両教授の退職ご挨拶、医師国家試験結果、卒業生進路、医学類入学状況が掲載されています。また、受賞、春の叙勲、医学図書館完成、金大病院CPDセンター完成、学会報告、革新予防医科学共同大学院についての記事もお届けします。

個人的には、新しい医学図書館の完成は特に感慨深いものがあります。今までの図書館は、私が学生の頃からほとんど変化がなく、古色蒼然の感否めませんでした。留学先の大学などで壮大な造りの図書館をみると、つい母校の図書館と比べてしまったものです。現在はインターネットで学術論文などかなりの情報が入手できる時代ですが、図書館はやはり大学の中核のひとつだと思います。記事にもあるように、外観も美しく、共用スペースも広くとってあり、学術活動の拠点として大いに活用されることでしょう。会員の皆様も是非一度、見学に足をお運び頂ければと思います。

（佐々木 素子 記）